

少女雑誌における「書くこと」の実践

牟田 有紀子

はじめに

19世紀後半のイギリスでは、中産階級の女子教育の拡充や就業機会の増加、初婚年齢の上昇などを背景として、子どもでも大人でもない「少女（girl）」という存在が注目されるようになった。学校・仕事・スポーツなどに関心を持つ活動的な少女像が文学や雑誌に登場し、少女とは何者か、どのような存在であるべきかという議論が活発になった。この時代の少女文化の発展を支えたのが少女雑誌である。極めて宗教的で保守的な *Monthly Packet of Evening Readings for Members of the English Church*（1851-99；以下 *MP*）、福音主義の立場をとりながら少女雑誌として初めて大規模な成功を収めた *Girl's Own Paper*（1880-1956；以下 *GOP*）、第一次フェミニズム運動に影響を受けて先進的な立場をとった *Atalanta*（1887-98）、商業主義的でモダンな *Girl's Realm*（1898-1915；以下 *GR*）は、宗教観、教育観、商業性において大きく異なるが、いずれも手紙、コンテスト、読者クラブや慈善活動などの読者参加企画を通して、少女たちに多様な「書くこと」の機会を提供した。少女雑誌は一般的な中産階級の少女の重要な情報源となり、理想的な少女像のあり方をめぐる議論の場でもあった。

手紙と質問・相談：読者の声の可視化

少女雑誌における最も基本的な「書くこと」の実践は、手紙や質問相談欄への投稿である。*MP* の“Notice to Correspondents”や *GOP* の“Answers to Correspondents”では、読者から寄せられた質問や相談、詩や物語などの創作に対する返答が掲載された。特に *MP* では、1850年代から読者による積極的な作品の投稿が継続的に行われていた。これらの欄は編集者から読者への一方的な情報提供ではなく、読者が雑誌との接点を求め、自らの意見や経験を表明する機会となった。しかし、誌面上に現れるのは読者の声そのものではなく、編集者によって選別され、再構成された声でもある。読者は自らの意思で雑誌に参加しながら、その発言は常に編集の枠組みの内部に置かれていたのである。

もっとも、読者は編集者の価値観を受容し、盲従していたわけではない。例えば、*MP* に「モダンな少女」を批判する記事が掲載されると、読者が反論を投稿し、その後も少女観をめぐる議論が誌上で展開された。この事例は、少女雑誌が理想的な少女像を提示する媒体であると同時に、少女たち自身がその意味をめぐって意見を交換する場でもあったことを意味する。誌面上では、編集者だけではなく、読者もまた少女観を語る存在となり、その過程で理想とされる少女像そのものが交渉の対象となっていた。

より大衆的な雑誌である *GOP* に目を向けると、読者からの投稿は誌面構成そのものを変化させる影響力を持った。創刊直後の“Answers to Correspondents”の投稿は服装や料理といった家庭的な話題が中心だったが、やがて教育、職業、資格試験、海外移住に関する投稿が増加した。こうした変化は、読者の関心が家庭内部にとどまらず、より広い社会へ向けられていたことを示す。また *GOP* では、過去の投稿を参照しながら返答が行われることも少なくなかった。このようなやり取りによって、互いに顔を知らない読者同士が誌面上で結び付けられ、継続的な関係が生み出されていった。1890年代になると、*MP* でも読者参加型コーナー“China's Cupboard”が設けられ、読者との交流がより積極的に行われるようになる。複数の雑誌における同時多発的な読者投稿欄の拡大は、少女たちの投稿が雑誌の出版継続に欠かせない要素になっていたことを意味する。このような手紙欄は、少女たちが自らの声を発する機会であり、少女観や価値観をめぐる議論を生み出す役割を担っていたのである。

コンテストと懸賞：「書くこと」の制度化・規範化

手紙欄において読者の声が可視化されたのに対し、コンテストや懸賞は、「書くこと」をより明確に評価と選別の対象へと変化した。無料の投稿欄では掲載されるか否かは編集者の判断に委ねられていたが、コンテストには賞金や賞品、誌面への掲載による承認が用意されていた。この評価の獲得が「書くこと」の目的となっていた。この構造が最も明確に見られるのが *GOP* の“Prize Competition”である。1880年に行われたエッセイコンテストには1500件以上の応募が集まり、優勝者には賞金が与えられた。ヴィクトリア朝において、少女たちが知的能力を競い、金銭による報酬を得る機会が大規模に提供されていたことは注目に値する。また、入賞者の氏名、年齢、住所が誌面上に掲載されたことによって、読者は単に作品を書く主体であるだけでなく、比較され、評価される客体としても可視化された。さらに入賞作品や講評でどのような文章が優れたものと見なされるのかが共有されることで、コンテストは理想的な少女像や望ましい表現の規範を生み出す場となった。

しかし、少女たちの創作への熱意は必ずしも編集者の期待と一致するものだったわけではない。1891年に *MP* で行われた創作コンテストでは、病気の子どもの不幸な未亡人、死別などを扱う作品が数多く寄せられた。これ

に対して編集者は安易に陰鬱な結末に流されることを批判した。この事例により、少女たちが雑誌の規範を受け入れるだけでなく、ときにそこから逸脱する想像力を持っていたことが明らかとなる。少女雑誌は規範を伝達する場であったが、その規範は読者との相互作用のなかで絶えず交渉されていた。

Atalanta の“*Atalanta Scholarship and Reading Union*”では、読者は毎月課題図書についてのエッセイを提出し、有料会員になると添削や講評を受けることもできた。年間優秀者には高額の奨学金も授与され、プロの作家も輩出された。ここで「書くこと」は継続的な学習と自己鍛錬の長期的なプロジェクトとなった。コンテストや懸賞は、少女たちに発言の機会を与えながら、その発言を評価し、序列化し、規範化する装置となっていた。そこでは少女たちは「書く主体」として積極的に参加する一方で、常に観察され、比較される「書かれる客体」としても位置づけられていった。

読者クラブと慈善団体：共同体の形成の媒介

市場競争の激化のなかで、少女雑誌は読者を受動的な購読者としてではなく、雑誌を支える参加者として取り込もうとした。その結果、投書欄やコンテスト、読者クラブや慈善団体が設立され、読者同士が交流する機会が数多く設けられるようになった。そこでは読者は編集者との関係に加えて、同じ雑誌を読む他の少女たちとの関係を築いていった。

その典型例が、*GOP* の慈善団体“*Girl's Own Guild of Sympathy*”である。この団体は読者から寄せられた数多くの手紙や要望を背景として1900年に設立された。会員は年会費を支払って会員になり、病気の子どもや困窮者への支援を行った。誌面には寄付金額や活動報告、新規会員の氏名が掲載され、読者はコンテストの入賞者でなくとも、誌面上にその存在を記録されるようになった。規約には、毎月このコーナーを欠かさずに読むこと、会員証に記載されたオリジナルの祈りを捧げること、そして新規会員を勧誘することが求められた。読者は寄付や活動への参加に加え、その成果や経験を誌面に報告し、他の読者と共有することが求められた。読者の行動は再びテキスト化され、共同体の内部で読まれる。この一連の流れが共同体のなかで循環し続けた。つまり読者は慈善活動の担い手として描かれながら、共同体を維持・拡大する役割を担わされていたのである。

こうした傾向は *GR* においてさらに発展した。1900年に創設された慈善団体“*Girl's Realm Guild of Service and Good Fellowship*”は読者自身によって運営され、海外にも支部を広げた。会員は募金活動を中心に、基金の設立、チャリティイベントの企画・運営、座談会や年次総会の開催も行った。通信欄も設けられ、会員同士がペンパル探しや物々交換を行うことも可能になった。雑誌を媒介として形成されていた関係性は、ここにおいて現実の空間へと展開し、具体的な人間関係として結実していった。そこでは少女たちは家庭の内部にとどまる存在ではなく、他の地域の読者や社会問題と関わる主体として行動した。しかし、この共同体が強い競争原理によって動いていたことを指摘しなければならない。1900年に発表された“*Grand Prize Announcement*”という記事では、一番多く新入会員を勧誘した読者に、ピアノと真珠のネックレスを賞品として与えるコンテストが告知された。読者は共同体の拡大に積極的に参加したが、その活動は競争によって促されてもいた。読者は行動し、それを記述することで「少女とは何者か」という理解を更新し続けた。一方で、その活動はつねに評価や比較の対象となった。少女雑誌における「書くこと」は、自己表現や評価の手段にとどまらず、最終的には現実の人間関係を構築し、拡張していく実践へと展開していったと言えるだろう。加えて、*GR* の読者が広告を出すことができる“*Personal Advertisements*”という欄では、「書くこと」は慈善活動や交流にとどまらず、市場との接触へも広がっていった。この欄では読者が自らの技能や労働力を売り出したり、住居や仕事に関する情報を求めたりすることができた。ここでは少女たちは商品の消費者としてだけでなく、自らの知識や技術を交換し、価値を生み出す存在として現れている。

むすび

少女雑誌における「書くこと」は、手紙欄における意見表明から始まり、コンテストにおける競争や評価を経て、読者同士の交流、慈善活動、さらには市場への参加へと広がっていった。少女雑誌における「書くこと」が重要なのは、そこに主体性の拡張だけでなく、その制度化や商品化の過程までもが可視化されている点にある。読者は、書く主体でありながら、その声は常に編集・評価され、雑誌という制度の内部へ組み込まれている。少女雑誌は、「書かれる子ども」が「書く子ども」へと移行していく過程、そしてその主体化が管理や商業化と不可分であったことを表出させるメディアであったと言えるだろう。このような少女雑誌における「書くこと」の実践は、近代メディアがいかに子どもの主体を生み出し、同時にそれを制度化し、流通させていたのかを考えるうえで重要な事例となる。